

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00242

研究課題名(和文) ザムエル・シャイトの声楽作品研究 「ドイツオルガン音楽の父」再評価への試み

研究課題名(英文) Reevaluating Samuel Scheidt, "the father of German organ music" - an examination of his choral work.

研究代表者

鈴木 陽子(米沢陽子)(Yonezawa Kaburagi, Yoko)

立教大学・キリスト教学研究科・特任教授

研究者番号：10638357

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではドイツバロック初期の鍵盤作品の大家と評される作曲家ザムエル・シャイト(1587-1654)の初期声楽作品を研究対象とし、作曲家としての再評価を行なうため、以下の各項目を実施した。(1)『カンツィオネス・サクレ』(1620年)のうち14曲について、校訂譜作成、歌詞対訳作成、楽曲分析、演奏実践、(2)『コンチェルトゥス・サクリ』(1622年)のうち2曲について、歌詞対訳作成、楽曲分析、演奏実践、(3)シャイトより一世代前の作曲家ガルス・ドレスラー(1533-1580)とシャイトの様式比較研究。(1)の、(2)の、(3)は動画を公開している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で取り上げたシャイトの初期声楽作品『カンツィオネス・サクレ』と『コンチェルトゥス・サクリ』は、これまで演奏機会が非常に稀であり、研究もなされてこなかった。専ら「鍵盤音楽の作曲家」として捉えられてきたシャイトが、声楽作品の分野でも優れた作品を残していることを楽曲分析、演奏実践の双方から実証できた。研究成果をレクチャーコンサートの動画配信という形で発信し、国内のみならずドイツをはじめ海外からもシャイトの音楽が評価された意義は大きい。国内でもシャイトに関心を持ち、演奏レパートリーに加えようとする動きが合唱関係者に見られることも本研究の目的の一端が達成できたと考える。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the early choral works of Samuel Scheidt (1587-1654), who was known mostly as a giant of early German Baroque keyboard works. The following was done in order to reexamine him as a composer through this lens. (1) 14 pieces from "Cantiones sacrae" (1620) - Creating a new edition, translation, analysis, and performance. (2) 2 pieces from "Concertus sacri" (1622) - Creating a new translation, analysis, and performance. (3) Comparative stylistic analysis against Gallus Dressler (1533-1580), a composer one generation earlier than Scheidt. Most of the above is available on video.

研究分野：演奏実践(鍵盤音楽)

キーワード：ザムエル・シャイト ドイツ・ルター派 複合唱作品 インタヴォリールング 教会音楽 ドレスラー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

ザムエル・シャイト Samuel Scheidt (1587-1654) は、J. S. バッハ (1685-1750) や ヘンデル (1685-1759) より約 100 年前に、ドイツ中部チューリンゲン地方の町ハレに生まれ、終生当地で活躍した作曲家・オルガニストである。同時代のシュッツ Heinrich Schütz (1585-1672)、シャイン Johann Hermann Schein (1586-1630) とともに「17 世紀ドイツの 3 大 S」の一人に数えられ、その優れた対位法技法とドイツ・ルター派教会音楽への貢献により「バッハの先達者」とも評されている。鍵盤作品集『タブラトゥラ・ノヴァ』(1624 年、全 3 巻 57 曲)と『ゲルリッツ・タブラチュア集』(1650 年、全 100 曲)を出版し、ドイツ鍵盤音楽の発展に大きく寄与し「ドイツオルガン音楽の父」とも呼ばれてきた。シャイトの功績の一つは、15 世紀から続く中部ドイツの伝統的な声楽ポリフォニー音楽の対位法を受け継ぎ、それを鍵盤作品のなかに実現させたことである。それゆえ作曲家としてのシャイトの実像を明らかにするには声楽作品の分析研究が必須である。

ザムエル・シャイト全集 Samuel Scheidt Gesamtausgabe は 1923 年から現在までに全 16 巻が刊行されている。第 1~5 巻は絶版で、日本国内での入手は困難である。鍵盤作品に関しては、H.フォージェルと P.ディルクセンの校訂により最新の知見が盛り込まれた『タブラトゥラ・ノヴァ』全 3 巻(1994~98 年)と、『鍵盤音楽作品集』(2012 年、全集では絶版の第 5 巻所収作品を含む)がブライトコプフ社から出版された。一方、声楽作品に関しては新たな校訂譜出版の動き見られず、録音も少なく、現在に至るまで詳細な作品分析研究もなされていない。鍵盤作品より遥かに多い 240 曲以上もの声楽作品が現存するにもかかわらず、シャイトの声楽作品には関心が向けられてこなかったことを示している。作曲家シャイトは極めて偏った評価をされてきたと言わざるを得ない。

本研究では平成 27 年度基盤研究(C)15K02195「ザムエル・シャイトの複合唱音楽『カンツィオネス・サクレ』に関する研究」の成果を土台に、シャイトの初期声楽作品『カンツィオネス・サクレ』について更に詳細な作品分析と演奏実践を行なう。この作品集はシャイトが初めて出版した大規模な宗教的合唱曲集で、編成は 8 声の複合唱(4 声合唱×2 群)である。この作品集を収めたシャイト全集第 4 巻(1933 年)は既に絶版、ドイツ国内でも演奏機会が少なく、詳しい研究がなされないまま現在に至っている。「対位法を駆使し、優れた鍵盤音楽を生み出したシャイトの声楽作品に音楽的価値がないはずがない」。このことを立証し、再評価に繋げるために本研究は立案された。

## 2. 研究の目的

17 世紀ドイツの鍵盤音楽史に大きな功績を残したシャイトの複合唱作品集『カンツィオネス・サクレ Cantiones Sacrae』(1620 年、全 38 曲、SSWV1~38)と『コンチェルトゥス・サクリ Concertus sacri』(1622 年、全 14 曲、SSWV72-84)を取り上げ、シャイトの初期声楽作品を通して作曲家シャイトへの再評価を行なうことが本研究の目的である。

シャイトの声楽作品はその編成規模から大きく 2 つに分類される。ヴェネツィア様式で書かれた大規模な編成の『カンツィオネス・サクレ』(8 声のもてつ)や『コンチェルトゥス・サクリ』(最大 16 声、管弦楽伴奏付き)は 1620 年代に作曲された。本研究では『カンツィオネス・サクレ』を中心的に扱い、より大規模の『コンチェルトゥス・サクリ』との比較研究も行ないながら作品分析を進めていく。

シャイトの作品の特徴は、キリスト教的世界観に則って対位法の音世界が構築されているということである。当時のドイツでは伝統的に、対位法は「神が創造した世界の秩序を表す」と考えられていた。そして対位法に長けた者は「学識ある音楽家 musicus doctus」として一目置かれる存在であり、シャイトもその一人であった。本研究においては、徹底した楽曲分析を行ない、シャイトの対位法技法を明らかにしていく。そして楽曲分析から得られた情報を演奏者に伝え、作品の構造と魅力を理解した上で演奏に臨んでもらう。音として鳴り響いてこそ、シャイトの音楽は聴き手に評価されると考える。

## 3. 研究の方法

### (1) スコアの校訂譜完成

1620 年出版の初版譜(パートブック形式。8 冊から成るパート譜)と 1933 年の全集版の楽譜とを詳細に比較し、研究協力者である演奏実践者の意見を仰ぎながら校訂譜を完成させる。完成した校訂譜はすべて Web 上で公開し、一般の利用に供する。

### (2) 対位法的技法、歌詞と音楽との関係を中心に楽曲分析を行う

シャイトが用いた対位法的技法によりどのように音楽が構築されているのかを分析する。また歌詞の内容と旋律、リズム、和声とをシャイトはどのように結びつけようとしたのかを分析により明らかにする。またシャイトが中部ドイツに伝わる声楽ポリフォニーの影響をどのように受け継いでいるのかという点についても解明する。

### (3) 『カンツィオネス・サクレ』と『コンチェルトゥス・サクリ』との様式比較

作曲年代に近い 2 つの作品は、様式的にどのように異なり、共通しているのかを考察する。こ

れは楽曲分析と演奏実践の双方から明らかにされるであろう。

#### (4) 自筆譜と筆写譜（タブラチュア、五線譜）の伝承、演奏実践に関する考察

シャイトの自筆譜は、当時の教会音楽家がどのようなレパートリーを持ち、教会音楽に関わっていたのかを知る手掛かりとなる。また紙が貴重品だった時代、演奏者は出版譜から自分のパートを筆写して演奏を行っていた。筆写譜からは、どのように楽曲が伝承され、演奏されていたのかを解明していく。ベルリン、ミュンヘン、クラクフ等の図書館所蔵のデジタル・データを利用して楽譜研究を進める。

#### (5) 演奏形態の検討（歌手や器楽の配置等）

演奏実践をする際、音響効果を考慮して演奏者を配置することになる。シャイトは独特の声部配置を施している作品やエコー作品なども作曲している。実際に演奏会場で試してみることが必要である。演奏会場は響きの良い教会を予定している。

#### (6) 演奏実践（レクチャーコンサートの開催）

本研究では研究協力者の櫻井元希及びサリクス・カンマーコアに演奏を委託している。中間発表、研究成果報告となるレクチャーコンサートを中間発表、研究成果報告として2回開催予定である。声楽作品はサリクス・カンマーコアが、オルガン独奏は米沢陽子が担当する。単なる声楽作品のコンサートではなく、実際にインタヴォーリリングを演奏することを通して、モテットとオルガンとの関係についても理解を深めることができる。

#### (7) 録音・録画

レクチャーコンサートでの講演と演奏を映像で残す。

#### (8) 研究成果を Web 公開する

収録した動画を YouTube に登録し、Web で公開する。これにより、シャイトの音楽の継続的な普及活動につなげることができる。

以上の研究方法により、音楽史のなかで見落とされてきたシャイトの声楽作品と作曲家シャイトを、実際に鳴り響く音楽により再評価する。さらに音楽史におけるドイツバロック声楽作品の系譜を再構築することを提言する。このことは15世紀から18世紀のバッハやヘンデル（シャイトの影響を受けたと考えられる）に至るまでの声楽作品の変遷を考察する上でも重要である。

本研究は音楽学者、声楽家、オルガニストの共同研究により成り立つものである。ここに本研究ならではの独創性があり、この包括的研究には大きな意義がある。本研究のように楽曲分析を地道に重ね、楽譜の校訂、それに基づく実演を通して、シャイトの声楽作品の魅力を紹介し、根気強く、広く世の中に発信していくことが重要である。

## 4. 研究成果

### (1) 筆写譜の精査

『コンチェルトゥス・サクリ』の筆写譜（ベルリン国立図書館 Ms.mus19-23）を精査。筆写譜は当時の演奏実践を知る手掛かりとなる重要な資料である。17冊のパート譜から成る作品集。五線譜で筆写されたパート別の楽譜は、日常的に歌い手が礼拝に使用していたと思われる。8声部から成るタブラチュアはオルガンの演奏には適さない記譜である。作品全体が見渡せるようタブラチュアによるスコアが作成されたということであろう。作品の伝承、あるいは研究用に記されたものとみられる。一方、声楽のパート譜は五線譜で記されており、この大規模な作品がどのように演奏されたのか、その一端を示していると考えられる。シャイトの自筆譜『プロッツ・タブラチュア』（ヤギエロン大学図書館 Mus.m.40056）は彼の日々の仕事の内容を窺い知ることができる貴重な資料である。今回はこの中からタブラチュアで記譜された《わが慰めと助けはただ神のみ Mein Trost und Hilf' ist Gott allein》（作曲：伝ドレスラー）を五線譜に写し、インタヴォーリリングとして演奏することができた。スロヴァキアのレヴォチャ福音教会所蔵の写本（MSS 13993）に記された8声のタブラチュアに関しては2曲を校訂譜と照合したところ、内容の一致が見られた。パート譜から筆写されたものと推定される。

### (2) 歌詞対訳の作成

2回のレクチャーコンサートで取り上げた16作品について歌詞対訳を作成した。これらの歌詞対訳はいずれも配信動画にて公開されている。ただし聖書本文に基づく歌詞の訳は、日本聖書協会発行『聖書協会共同訳聖書』（2018年）に拠っている。

### (3) 作品研究

シャイトより約半世紀前に中部ドイツで活躍したガルス・ドレスラー Gallus Dressler (1533-1581)に関する研究に取り組んでいる研究分担者・大角欣矢は、ドレスラーとシャイトの作品の比較研究を行った。シャイトがテキストの内容を音楽へと移し替えている仕方を典型的に見ることができるとし、同時にドレスラーというルネサンス時代の作曲家の作品をシャイトによる初期バロック期の作品と比較することで、それぞれの時代における様式的特徴に光を当てた。講演では《神よ、私を裁き Richte mich, Gott》（詩編43）という同じテキストに基づくドレスラーとシャイトの作品を比較し、両者とも第7旋法で作られていること、第7旋法の持つ性格（怒り、叫び等）と歌詞の内容、また16-17世紀におけるプロテスタントとカトリックの対立という社会的状況とも関連付けて述べている。これらの研究成果は、2021年8月より動画配信されたレクチャーコンサートの講演の部「ガルス・ドレスラーとザムエル・シャイトの《神よ、私を裁き Richte mich, Gott》について」において詳細な報告がなされている。

またシャイトの自筆譜『プロッツ・タブラチュア』所収の《わが慰めと助けはただ神のみ Mein Trost und Hilf' ist Gott allein》(伝ドレスラー作曲)は複数の作曲家が編曲をしており、当時の人気曲であったことが窺える。ドレスラーが後世のドイツ・ルター派圏の宗教音楽に影響を及ぼしたことを示すひとつの興味深い例であると言える。今回ドレスラーの作である可能性が高いことが明らかになった楽曲《わが慰めと助けは神のみ》をシャイトがタブラチュアに記し、それをコンチェルト化した楽曲も書いていることは、過去からの伝統との繋がりや取り組みを示す興味深い事例であると言えるだろう。

また研究代表者の米沢陽子は、『カンツィオネス・サクレ』中 12 曲について楽曲分析を行い、シャイトが工夫を凝らして歌詞の内容を音楽で表現しようとしたことを確認した。

#### (4) 校訂譜の作成

校訂譜の作成にあたっては課題研究 15K02195 のときと同様、初版譜(1620 年)と全集版(1933 年)とを入念に比較して相違点をチェックする、全集版を土台に楽譜を作成し、相違する箇所について検討する、作成した楽譜を研究協力者である声楽家が目を通し、演奏上の疑問点と問題点を挙げる、さらにリハーサルにおいて生じた問題点を検討し、歌詞の付け方、音符の修正を行なう。以上のような手順で行なった。実際に演奏に関わる声楽家の見解を反映させることで、より演奏に即した校訂譜を作成することが可能となる。本研究で完成した校訂譜は体裁が整い次第、ウェブ上で公開し、一般の利用に供する予定である。

#### (5) 『70 のシンフォニー』のパート譜作成

『コンツェルトゥス・サクリ』から取り上げた 2 曲を演奏する際、当時の習慣に従い、前奏として短いシンフォニアを器楽奏者が演奏した。このためスコアからパート譜を作成した。

#### (6) インタヴォリールングの演奏実践

ドレスラー作曲のモテット《神よ、私を裁き Richte mich, Gott》は鍵盤楽器で演奏するためのインタヴォリールングとして編曲され、タブラチュア(文字譜)で記されたものが残されている。本研究ではバイエルン国立図書館 Mus.ms.4748 所収のタブラチュアを五線譜に書き起こし(解読・楽譜作成:菅沼起一)研究代表者・米沢陽子が装飾を施して演奏した。またシャイトの自筆譜『プロッツ・タブラチュア』所収の《わが慰めと助けはただ神のみ Mein Trost und Hilf' ist Gott allein》(作曲:伝ドレスラー)についても、菅沼がタブラチュアを解読し、米沢が演奏を行なった。これらの演奏実践は、16-17 世紀当時のオルガニストが声楽モテットを日常的に礼拝の中で独奏用に移し替えて演奏、即ちインタヴォリールングを再現するものであった。これら 2 つのインタヴォリールング作品は、声楽作品と並べてレクチャーコンサートで演奏された。演奏に使用した楽譜は Web 公開の予定である。

#### (7) 校訂譜に基づく演奏実践と録音・録画

本研究においては、2 回のレクチャーコンサートにおいて演奏実践を行なった。まとまった数のシャイトの声楽作品を集めたコンサートは恐らく国内では他に例はないと思われる。

研究協力者であり、演奏を統括した櫻井元希は本研究で取り上げたシャイトの作品について次のように述べている。

「カンツィオネス・サクレの方は、ポリフォニックな部分とホモフォニックな部分がバランス良く展開され、非常に緻密な二重合唱の作品です。それに対してコンチェルトゥス・サクリの方は、ソロや重唱と tutti の交代によって展開する作品で、同じ二重合唱でありながら、声楽の扱い方は対照的です。こちらの方は緻密というよりはダイナミックです。初期バロックでは、バロック的な要素(言葉を軸に和声的に展開される)とルネサンス的な要素(旋律を軸に対位法的に展開される)が混在していたり、書き分けられたりしているのですが、ざっくりいうとカンツィオネス・サクレの方はルネサンス的な要素が強く、コンチェルトゥス・サクリの方はバロック的な要素が強いです。バロック的とは言っても、今回の 2 曲はラテン語による作品なので、ドイツ語の作品ほどは語感が強調されません。つまり「喋る」よりも「唱える」要素が強いです。この辺のバランスが非常に繊細で、表出的になりすぎてもおかしいし、旋律優位にしすぎてもおかしい。ちょうど絶妙なバランスが取れた時に初めて、この音楽が言わんとしていることが立ち現れます。私たち Salicus Kammerchor のバックグラウンド的には言葉からのアプローチで育ったところがあり、サリクスが出来てからは、グレゴリオ聖歌の歌いまわしからヒントを得た旋律をいかに歌うかということに注力し、そこにアイデンティティを見出してきました。これが、どっちかならともかく、どっちもというのがむっずいわけですね。いや常にそうなんですけど、大体これはこっち寄り、これはあっち寄りというのがあって、絶妙に両方の要素が必要、というのはそう多くはないのではないかと思います。」(櫻井元希ウェブサイト Servus Musicae より引用。https://genkisakurai.com/ 2022 年 3 月 16 日)

研究成果発表のコンサートでは、卓越した歌唱力を持つ声楽陣と、国内では数少ない一線級のサクバット、ツィンク奏者も参加した古楽器アンサンブルとの共演により、まさにシャイトの作品に相応しい輝かしい音色を響かせることができた。収録された動画は YouTube を通じて国内のみならず、ドイツをはじめ海外でも視聴されている。この成果は特筆すべきであろう。2 回のレクチャーコンサートの概要は以下の通りである。

**中間発表** 収録:令和 3 年(2021 年)7 月 22 日、日本福音ルーテル東京教会

レクチャーコンサート ザムエル・シャイト『カンツィオネス・サクレ』をめぐる

- 「ドイツオルガン音楽の父」の声楽作品 -

## プログラム

- 《おお、主イエス・キリストよ O Domine Jesu Christe》SSWV 6  
《二人のセラフィムが Duo Seraphim》SSWV 10  
《讃えられよ、イエス・キリスト Gelobet seystu Jesu Christ》SSWV 11  
《父なる神よ、私たちとともに住み Gott der Vater wohn uns bey》SSWV 17  
《誰かが私の主を取り去りました Tulerunt Dominum meum》SSWV 20  
《泣きながら身をかがめて Cum ergo fleret》SSWV21  
《神よ、私を裁き、私のために争ってください Richtete mich, Gott》SSWV 24  
《あなたの光とまことを遣わしてください Sende dein Licht und deine Wahrheit》SSWV 25  
《主をたたえよ、まことに主は恵み深い Lobet den Herren denn er ist sehr freundlich》SSWV 27  
《シオンは言った、「主は私を見捨てられた」と Zion spricht: Der Herr hat mich verlassen》SSWV 33  
《まず神の国を求めなさい Quaerite primum regnum Dei》SSWV 34  
《主の聖所で神を賛美せよ Lobet den Herren in seinem Heiligthumb》SSWV 37

## サリクス・カンマーコア

S: 楠木綾 中須美喜 A: 金成佳枝 富本泰成 T: 渡辺研一郎 金沢青児 B: 櫻井元希 三上翔  
Org: 新妻由加  
録音・録画: PENGUIN PICTURES 編集: 新村拓哉、櫻井元希  
オルガン提供・調律: 石井賢 (a'=442、1/4 Meantone Temperament、Es / Gis)

## 研究成果報告

収録: 令和4年(2022年)2月19日、立教学院諸聖徒礼拝堂  
レクチャーコンサート「ザムエル・シャイト『カンツィオネス・サクレ』と『コンチェルトウス・サクリ』

## プログラム

伝ガルス・ドレスラー《わが慰めと助けはただ神のみ》によるインタヴォリールング  
オルガン独奏・編曲: 米沢陽子  
伝ガルス・ドレスラー(1533-1580)  
《わが慰めと助けはただ神のみ Mein Trost und Hilf ist Gott allein》  
ザムエル・シャイト(1587-1654)  
『カンツィオネス・サクレ』より  
《心よりあなたを愛します、おお、主よ Hertzlich lieb hab ich dich o Herr》SSWV28  
《たとい私の心がくずおれても Und wenn mir》SSWV29  
『コンチェルトウス・サクリ』より  
シンフォニア SSWV423(『70のシンフォニア』より)  
マグニフィカト第8旋法 SSWV81  
シンフォニア SSWV428(『70のシンフォニア』より)  
《今日、五旬節の日が満ちた Hodie completi sunt dies Pentecostes》SSWV75  
《聖霊は彼らを全世界へと送り出した Misit eos in universum mundum》SSWV76

## サリクス・カンマーコア

S: 楠木綾 中須美喜 A: 金成佳枝 富本泰成 T: 渡辺研一郎 金沢青児 B: 鳳城昊 小藤洋平  
Vn1: 遠藤結子 Vn2: 大光嘉理人 Va: 佐々木梨花 Vne: 角谷朋紀  
Zink: 上野訓子 Sackbut A: 宮下宣子 Sackbut T: 南紘平 Sackbut B: 石原左近  
Org: 新妻由加 指揮: 櫻井元希  
録音: 新村拓哉  
オルガン調律: 木村秀樹 (a'=466、Meantone Temperament)

本研究では、2回にわたるレクチャーコンサートを通じて、シャイトの初期声楽作品に光を当て、楽曲分析と演奏実践によって、シャイトが優れた声楽作品を残していることを確認できた。シャイトの先達たち J.ヴァルター、ドレスラー、ラッススら16世紀の作曲家の伝統を受け継ぎ、また同時代のミヒャエル・プレトリウスやシュッツとの関わりの中で、ルター派教会の礼拝を通じて、シャイトは自らの声楽作品の世界を構築していったのだろう。この研究成果を踏まえて、今後はシャイトの中期の声楽作品にも目を向け、作品分析と演奏実践を通じて、さらに研究を深めるとともに、合唱愛好家へのレパートリー紹介も進めていく所存である。

シャイトの音楽に生命を吹き込み、シャイトの音楽の素晴らしさを実証してくれたサリクス・カンマーコアには心から敬意を表し、感謝を申し上げたい。

令和4年度からは基盤研究(C)22K00259「ザムエル・シャイトの中期声楽作品研究 17世紀ルター派の礼拝音楽実践を手掛りに」においてシャイトの声楽作品に関する更なる研究を継続して行なっていく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>大角欣矢   | 4. 巻<br>69          |
| 2. 論文標題<br>「ヨハン・ゼバスティアン・バッハの《マタイ受難曲》 抜粋曲例にみる音楽的着想の源泉とその解釈」 | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>『礼拝・音楽研究』  | 6. 最初と最後の頁<br>32 58 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                              | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                     | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>大角欣矢   | 4. 巻<br>70          |
| 2. 論文標題<br>「J. S. バッハ作曲 カンタータ BWV 140《目覚めよと呼ばる声す》について」     | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>『礼拝・音楽研究』  | 6. 最初と最後の頁<br>51 87 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                              | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                     | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>米沢陽子   | 4. 巻<br>188         |
| 2. 論文標題<br>「セシリア運動の諸相 教会音楽のあり方を探求した人々」                     | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>『礼拝と音楽』  | 6. 最初と最後の頁<br>22 26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                              | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                     | 国際共著<br>-           |
| 1. 著者名<br>鎗木陽子   | 4. 巻<br>14          |
| 2. 論文標題<br>「音楽による癒し」                                       | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>『カトリック文化 カトリコス』                                  | 6. 最初と最後の頁<br>1-23  |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                              | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                     | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>大角欣矢                         | 4. 巻<br>68          |
| 2. 論文標題<br>「ルター派教会音楽と教会暦」              | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>『礼拝・音楽研究』                    | 6. 最初と最後の頁<br>14-36 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>米沢陽子  | 4. 巻<br>46         |
| 2. 論文標題<br>「ドイツオルガン音楽の父」ザムエル・シャイト再評価への一考察 複合唱作品『カンツィオネス・サクレ』(1620年)を手掛かりとして | 5. 発行年<br>2019年    |
| 3. 雑誌名<br>『オルガン研究 XLVI 2018』  | 6. 最初と最後の頁<br>1-18 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                                      | 国際共著<br>-          |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>大角欣矢  | 4. 巻<br>67          |
| 2. 論文標題<br>「1580年代から1720年代にかけてのドイツ・ルター派における教会音楽を巡る論争」 | 5. 発行年<br>2018年     |
| 3. 雑誌名<br>『礼拝・音楽研究』                                   | 6. 最初と最後の頁<br>28-47 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                        | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>大角欣矢                                    |
| 2. 発表標題<br>J.S.バッハ 作曲カンタータ BWV140《目覚めよと呼ばわる声す》について |
| 3. 学会等名<br>東京基督教大学教会音楽アカデミー「第2回公開講座」(招待講演)         |
| 4. 発表年<br>2019年                                    |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>米沢陽子                            |
| 2. 発表標題<br>クーナウ『聖書ソナタを読み解く』 音楽フィギュールを手掛かりに |
| 3. 学会等名<br>日本基督教団東北教区 第38回礼拝と音楽研修会（招待講演）   |
| 4. 発表年<br>2019年                            |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>大角欣矢   |
| 2. 発表標題<br>Untersuchungen zur Ueberlieferung der Werke von Gallus Dressler (1533-1581)                                      |
| 3. 学会等名<br>XVII. Internationaler Kongress der Gesellschaft fuer Musikforschung (28.September - 1.Oktober 2021, Bonn) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>米沢陽子                              |
| 2. 発表標題<br>ザムエル・シャイトの音楽語法 宗教的声楽作品と鍵盤作品を手掛かりに |
| 3. 学会等名<br>立教大学キリスト教学会2022年度大会（招待講演）         |
| 4. 発表年<br>2022年                              |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

立教大学キリスト教学研究科ホームページ  
 レクチャーコンサート ザムエル・シャイト『カンツィオネス・サクレ』と『コンチェルトウス・サクリ』 「ドイツオルガン音楽の父」の初期声楽作品をめぐって  
<http://rikkyo-kiriken.com/events/index.php?QBLog-20220310-1>



## 6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                    | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                 | 備考 |
|-------|--|---------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 大角 欣矢<br><br>(Osumi Kinya)<br><br>(90233113) | 東京藝術大学・音楽学部・教授<br><br><br><br>(12606) |    |

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|--------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 櫻井 元希<br><br>(Sakurai Genki)   |                       |    |
| 研究協力者 | 菅沼 起一<br><br>(Suganuma Kiichi) |                       |    |
| 研究協力者 | 木内 涼<br><br>(Kiuchi Ryo)       |                       |    |
| 研究協力者 | 前田 皓生<br><br>(Maeda Kosei)     |                       |    |
| 研究協力者 | 高橋 美紗<br><br>(Takahashi Misa)  |                       |    |

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |